

私たちは悲しみの中に
生命のつながりと
生きる勇気を見出してきました



身近な人を亡くした時の悲しみほどつらく苦しいものではありません。

それが突然に訪れたのならなおのこと、いや、その時がやがて訪れることを

自らに言い聞かせる多少の時間があつたにしても、その瞬間にポツカリとあいてしまった心の穴は容易に埋めることなどできないくらい深くそして大きいものです。

その悲しみは、時とともに、やがて亡き人への感謝や追慕の念に包み込まれてゆきますが、それは、決して「死」という場面が過去の出来事として風化してしまうからではなく、

姿かたちは見えなくなっても、亡き人がいつも傍らで見守ってくれている、励ましてくれている、という安心感が日ごとに強くなるからなのでしょう。

「生は死とともにあり、死なくして真の生はありえない」と言いますが、身近な人との悲しい別れは、私たちにとって自らの生命の尊さを知り、今に生きていることの意義を見つめ直す、

大切な機会であることも、また事実です。

自分を生み育ててくれた両親、

人生とともに歩んできた伴侶、

悩みを打ち明けることのできた数少ない親友……

失ってこそ、改めてその人の存在の大きさを知り、有り難さに気づく。

多くの人々に支えられて生きていることを静かに顧みながら、

個人の「死」を超えた生命のつながりを実感し、「生」への思いをより強くすることが

亡き人に対する報いであることを、私たちは無意識のうちに自覚しているのかもしれない。